

## 海外紹介

## 世界の鍼灸コミュニケーション(23)

## フランスにおける鍼灸の発展史

アラン・ブリオ

Alain Briot

## 要 旨

鍼灸医学の知識がフランスに初めてもたらされたのは1671年、フランス人イエズス会士の執筆にかかるパンフレットを通じてであった。この中国の脈診について論じたパンフレットはクライエルや、テン・ライネ、ポイムらの著作による鍼灸の紹介に十年以上先立つものである。

17世紀のフランス社会では中国趣味が広まったこともあり、中国医学についても北京に駐在するイエズス会士達の記録を通じて多くが知られるに至った。しかしながら当時においては、薬物や脈診といったトピックから東西医学の相互関係を論議することに焦点が置かれたため、ケンペルが著作のなかで鍼灸医学について多くのことを伝えたにもかかわらず、中国医学に対する関心は総じて異国趣味の域を出るものではなく、医療としても非科学的な施術という認識しかなかったといえる。

フランスでは19世紀初頭、Berlioz、Cloquet、およびその後継者達によって初めて本格的に鍼灸が臨床で応用された。そして彼等からやや遅れてSarlandièreが鍼への通電を初めて試みた。しかしこれらの先駆者による鍼灸の実践は、いずれも個人的な実践に終始し、しかもその内実疼痛箇所への刺鍼でしかなかった。彼らの鍼灸医学に対する誤解、臨床での過剰刺激は、結果として19世紀半ばにおける鍼灸の衰退を招くことになる。19世紀半ばにはDabry de Thiersantが中国伝統医学に関する優れた著作を世に問うたが、上述の傾向をおしとどめることはできなかったのである。

フランスにおいて中国の鍼灸が真の意味で再興を遂げたのは1930年代であり、その立役者となったのは中国文化に対して深い理解をもつSoulié de Morantであった。彼の後継者達は、多くの鍼灸学校での教育を通じてフランスにおける鍼灸の発展に貢献してきた。これらの鍼灸学校は今日でも続いており、伝統派、科学派を問わず多くの人材を輩出している。

またフランス鍼灸の発展過程には、散発的ながら日本の鍼灸の影響も見受けられる。本稿ではこうした日本鍼灸の影響についても、いくつかの事例を挙げて説明した。

キーワード：フランス、鍼灸史、スリエ・ド・モラン、サルランディエル、ダブリ

・フランスへの針灸の伝来  
1977年パリで開催されたルイ14世所蔵コレク

ション展において、多種の貴重なデッサンと稀覯本の中にあつた一冊の中国古書が見物人の目をひ

いた。それは、1443年新版といわれている王惟一撰の『銅人形俞穴鍼灸図経』であった。これは、間違いなくフランスに最初伝来された針灸書と思われる。そして、太陽王と呼ばれたルイ14世の中国への大いなる好奇心を示しているものであった。

1685年にルイ14世が清朝廷に、イエズス会士であり数学者でもあった6人の外交兼科学使節団を派遣した際、康熙帝からルイ14世への賜書であった。

これに先立ち、1671年にフランスのグルノブル市で『中国人の医学の秘訣、即ち脈診の完全知識』という本が出版された。著者不明であったので、その確認について医学史家たちは大いに議論した。もっともらしい仮説では1665-1668年間広東に追放されたフランス人のイエズス会士の1人が著者だとされた。この本の原典は『脈訣』の異本とされており、1682年版のクレイエル *Specimen Medicinae* との類似点が多い。付録の「日本の医療について」という章はフランス語の最初の日本の針治療の記述として非常に面白い。

「気は時折、内臓や腸の中に滞り、そこから出られないことがある（気の所在が深すぎたり、放出口が不完全であったりするため）。この場合、先のやや鈍い長い銀の針を用い、"はれはれ"（ママ）と繰り返していいながら、2本の指で撚り、深部までそれを挿入すると、直ちに気が放出され、痛みが治まる。」

著者は広東で日本に行った東インド会社のオランダ人からこの情報を聞いたのかも知れない。17世紀の終わり頃、ドイツのクレイエル著 *Specimen Medicinae Sinicae*（フランクフルト・ナム・マイン、1682年版）、長崎出島のオランダ商館の医師テン・ライネ著 *Dissertatio de Arthride*（ロンドン、1683年版）およびポーランド出身のイエズス会士ボイムの著 *Clariss. Midica*（ヌレンベルグ、1686年版）等が次々に出版された。

針灸については、テン・ライネの本が最も詳しい。これらの販売部数はどれくらいであったろうか。いずれにしろ、フランス医学界における中

国医学への興味を呼び起こしたに違いない。

18世紀には、中国滞在の宣教師たちの書簡集が度々出版されるとともに、彼らの学術的記述は、デュ・ハルドやブレキニイによって編纂され、それらはフランスの一般人の中国愛好を流行らせ、そして医学界の中国学術への関心を継続させた。しかし、当時ヨーロッパ学会で話題となった生薬、脈診法、種痘法などの問題に比較して、針灸療法に関する記述は非常に少ない。

テン・ライネの本と同じく、フランス人の針灸への関心をそそったのは、元禄年間に来日したドイツの医師ケンペルの著作であろう。彼の有名な『日本誌』は日本鎖国論など種々の問題を取りあげており、モンテスキュ、ヴォルテル等の哲学者たちを含めて、フランスのインテリ階級全体に深い影響を及ぼした。

#### ・ケンペルによる日本針灸の紹介

ケンペルは1712年ラテン語版の *Amoenitates Exoticarum* 『廻国奇観』の中で日本滞在中に実際に目で見た疝気の針治療を語る。さらに探訪記者兼医師の筆でその画期的な灸灸考を述べる。彼は現在に至っても、なお科学研究者たちの頭を悩ませている問題に触れている。即ち、「日本の針灸師はしばしば患部から全く離れた個所を経穴として選ぶ。この経穴は解剖学的にも患部とは直結しておらず、身体の一部としての繋がりを持つに過ぎぬと思われるような個所である。・・・中略・・・解剖学者がもっとよく研究すれば、脈管の特別な結びつきがあることが判るかも知れない。（今井正 訳）」と。

ケンペルはこの珍しい治療法の応用性を考えて、その付録に「諸国を遍歴する旅灸師からも買え、・・・中略・・・灸術のこつを要領よくまとめた本」である「灸所鑑」の翻訳を載せ、虎口（合谷）、脾俞、天枢、気衝、風門などの灸穴について述べた。その中にあるケンペル自身が模写した灸穴図の挿絵は我々に謎をかける。この図には漢字で灸所鑑と記されており、そのラテン語訳 *Urendsrum Cocorum Speculum*（灸がすえられるところ）が書いてあるのに、東郷俊宏氏が指摘されたように何故か禁灸穴の図である。

ケンペル死亡後、その未発表の『日本誌』の原稿を整理し英訳したショイツァーはその増補の中に『廻国奇観』から日本に関する論文を取り入れた。『日本誌』の英語版は1727年、仏語版(ドメゾ重訳)は1729年に刊行された。5年後ポケット版が出たほど好評嘖々であった。英仏両版では『廻国奇観』の『灸所鑑』の日本人型人体図をアカデミー風の西洋人型に描き替えたのに、知らずに禁穴の図を載せてしまったのは何とも面白い。フランスでは、18世紀前半にテン・ライネ、ケンペル等のお陰で針灸のことは周知であった。それにも拘わらず、19世紀まで従来の医療とあまりにも違いすぎていて、非科学的にみえたせいか、この異国的療法を試みた人はいなかった。

#### 外科全史

1774年版のデュ・ジアルタン編の『外科全史』は針灸の知識をまとめたものである。中国との交流が中断された当時であって成功を収めた。この本は、19世紀初期に初めて針療法実験を行った人々に影響を及ぼしたという。なぜ鍼灸のことが『外科全史』に扱われているのかというと、次の一節から理解できる。「日本においては外用療法を施す者は外科医である。その名称はGecgua(ゲクワという)・・・」とある。デュ・ジアルタンは正確に内臓の相互関係及び身体の各部との繋がりを記述した上で次の考察を加える。「わが国においては、人体各部のみを研究していたので、ヒポクラテスその他すべての真の医師が、深く観察した人体の全般またはその各部の相互関係の実践的知識を無視してしまった。これらの点から鑑みて中国人の医学がいかほど不完全で理屈に立たないとしても、その全体観には注意を引く価値がある。

#### ルイ・ベルリオズによる鍼術の実践

1810年にはヨーロッパで初めて鍼術を試みたルイ・ベルリオズが登場する。有名な作曲家ヘクトル・ベルリオズの父であるルイ・ベルリオズ(1776-1848)は、アルプ地方の小さな村の医師であった。彼が鍼術を試みようとしたきっかけには、いろいろの要素が集まっていたと思われる。まず、

当時まで広く用いられていた瀉血法には多少の問題点があった(例えば、1799年米国のワシントン大統領は2.8リットルの瀉血で死亡した)。また、古人の人体各部の相互感応力説が再び流行になっていた頃であった。

ベルリオズの最初の針治療法実験例は、難治の頭痛持ち、さらに上腹痛を病む若い女性であった。彼は多種の療法を試した後、窮余の一策として針術を試みた。彼自身が針を刺せないかのように、敢えて患者自身が腹壁を先ず垂直に、それから水平方向に沿って縫い針を刺し入れた。「痛みは魔法のように急に止まった」という。現在の歴史家はヒステリーの一例ではないかと思う。

ベルリオズは1816年刊の「慢性疾患及び瀉血と鍼術に関する論文」の中にこのように述べる。

「予がおこなった鍼術実験は意義がなくはないだろう。この療法は今までヨーロッパだけでなく他の大州にも応用されていなかった。なぜかというところ中国人と日本人は全く経験に頼るだけで、それをを用いてその使い方を理解化している資料は一つもない。」

また、他のページには、

「ケンペルとテン・ライネの針灸への礼賛は正当のものである。この療法がヨーロッパで知られている1世紀以上も前から現在までどの医師もそれを試みていないということは驚くべきである。・・・中略・・・特に単性神経痛においては、針術は明らかに医師の注意を引く。それはこれほど速やかな作用で、妙な効果をもたらす療法は他にないからである。」

この文章を読むと、ベルリオズが針術に対しては無理解にも拘わらず熱狂的な受容態度を示したことがわかる。彼の論文には外傷などのいろいろの適応症に対する針治療法の成功を列挙する。また、針の作用を強化するため2本の違った金属の針を刺した後、さらにもう1本の針をその2本に接触させる方法を工夫する(これは150年後の間中喜雄氏の実験を予示する)。しかし、この効果

はあまり見られなかったので、ベルリオズはボルタの電堆によって電気衝撃を与えたら、針の効果を増大できるのではないかと考えた。実はベルリオズとクロケ等の針術は痛いところの真ん中に長い針を残酷に刺すに過ぎなかった。

#### 電針術の出現と針灸の衰退

ベルリオズに次いで1825年に外科教授ジュール・クロケ(1790-1883)はパリの病院で初めて針術治療を取り入れる。同年彼の2人の弟子モランとル・ダンチェは彼の治療例について論文を提出する。同年1825年サルランディエルは「痛風、リウマチ、神経疾患を治療する新規の方法である電針術に関する論文」を刊行する。その序の中でベルリオズのことには触れず、彼は針術においてクロケより先行したと主張する。いずれにせよ、サルランディエルはヨーロッパで最初に経穴に電針法を応用した人とされてもよいと思われる。換言すれば、東洋針灸学と西洋科学の折衷の先駆者といえよう。

サルランディエルの論文の最も興味深い点は付録に載っている安政7年刊木村元真著『鍼灸極秘抄』の仏訳と図法師の挿絵にある。サルランディエルが使った資料、即ち和本の原文とその翻訳の原稿及び図法師の実物は、1779-1784年間出島オランダ商館長であったティツィング(1745-1812)の遺品からの出所であり、これがサルランディエルの友人で有名な東洋学者クラブロットの手に入り、更にサルランディエルに譲り渡されたものである。

サルランディエルの本の特筆すべき点は、『鍼灸極秘抄』の仏訳に出ている経穴と挿絵の図法師のツポに对照数字を付したところにある。しかし、これらの先駆者たちの努力にも拘わらず、針灸は1830年頃から、いつの間にか忘れられるようになってしまった。

その後、1863年に公に出たダブリ・ド・ティエルサン(1826-1858)著の傑作『中国人の医学』さえも民俗医療とされてきた針灸を蘇らせることができなかった。

この580ページの書物はそれに先だって書かれたフランス文のすべての中国医学関係の本にはる

かに勝っているといっても過言ではない。現代も学者の間で重視されている程である。

ダブリは1857年から1871年まで、フランスの陸軍理事少佐として中国に派遣されるとともに在上海フランス国領事に任命された。

「我は医師ではないから、中国人の医学諸説と彼らの多少とも合理的治療法への評価は敢えてしない。ただし、我にとって不思議にさえ思える療法を目で見たことは断言する。それ故、我が認めた多数の回復の例から鑑みて、近代科学は中国古代文化から何か利点を借用すれば良いと確信している」と緒言に述べる。

ダブリは「通訳者の口述による針灸についての簡単で明晰な説明を聞き取り、それをまとめて本に載せた」という。

彼が使用した主な参考文献は次のとおりである。『景岳全書』、『医林改錯』、『東医宝鑑』、『本草拾遺』、『温疫論』、『医宗金鑑』、『鍼灸大成』、等。

書の第一部は80ページにわたって中国医説の概論を詳しく述べ、この部は深遠な興味を有する。180年前の先輩クレイエル、テン・ライネ等の概論はすでに周知であるから、著者は最初この部を省略する予定だったが、天津及び北京に滞在中、中国の名医の援助を得て、上記の書の正確さを認識するとともに、その校正増補を行った。詳しい脈診法の部に続いて、舌診法を記述する。付録にアベル・レミュザ(1788-1882)が1831年にラテン語で提出した医学博士論文「舌診漢洋一致論」をも載せる。針灸の部はほとんどが『鍼灸大成』の翻訳であり、これは75ページを費やしている。ダブリも文章中の経穴と挿絵の詳細な図の経穴各所に388の对照数字を付けた。

残念にもダブリのこの素晴らしい仕事は、期待されたほどの反響を呼ばなかった。この本が出た頃は、クロード・ベルナルとパステルが唱えた実証主義の全盛時代であった。随分長い間みんなあらゆる症状に対して非方法論的な針術を施したので、針灸の信用は徹底的に失われてしまったのである。これらの理由によりダブリのせっかくの苦心も徒勞に帰ってしまったといえる。

### スリエ・ド・モランと鍼灸の復興

フランスの現代鍼灸学に飛躍的な発展をもたらしたのは、スリエ・ド・モランである。スリエ・ド・モラン（1878-1955）はその両親の友人の女流詩人ジュディット・ゴティエが泊めていた若い中国人から中国語のレッスンを受けていた。そして、20歳のころ銀行員として北京に派遣された。その後上海と雲南府にてフランス領事として勤務する傍ら、余暇を利用して中国歴史、芸術と鍼灸に関心を向けた。

18年後、フランスに帰った彼は作家の仕事に身を捧げようと思ったが、温泉場ラ・ブルブルに滞在した折りに医師フェレーロル（1850-1955）と交友が始まり、彼に針治療を普及させるように励まされた。いつの間にかパリの医学界にも彼らの弟子のグループが広まってきた。1932年にパリの病院部門長フランダンがスリエ・ド・モランとフェレーロルに針治療診察を行わせた。

スリエ・ド・モランはその大著述『中国鍼灸学』著作のための下準備として、1934年に『真正中国鍼灸概要』を発刊したが、その発行直前、彼と桜沢如一の共訳で中山忠直著『漢方医学の新研究（初版昭和4年）』を翻訳し、『日本において検討された鍼灸及び漢方医学』を刊行する。おそらくこの本はフランス医学界に鍼灸を受け入れる心構えを作ることを意図していたのであろう。この桜沢（1893-1966）は医師兼哲学者で、若い頃渡仏してジョルジ・オーサワという偽名のもとで太極と陰陽説に基づく自然哲学を打ち立て、若干の名声を得ていた。その学説を応用して厳しい食餌療法を世に広めて更に名を上げた。60年代には、彼の信奉者が増大したが、その療法が身体に危険を及ぼすこともあったので、医学権威者の批判的となった。

どういったきっかけでスリエ・ド・モランは桜沢と知り合ったのか、どれくらい、いつまで交際を結んだのかが不明である。いずれにせよ1967年桜沢は自身が書いた『針灸』という小冊の中で、「30年前にヨーロッパに鍼灸を知らせるために、スリエ・ド・モランと協力した理由は、当時東京へ行く旅費として必要な何千フランを儲けるためである」と告白する。

スリエ・ド・モランは中国滞在中に赤痢とマラリアに罹ったので1906年しばらく療養のため日本に行ったが、その滞在状況は不明である。彼の日本への関心を明らかにする一例を挙げたい。帰国後、彼の作家活動時期に中国文化関係の大文芸作品の他に、1927年為永春水の忠臣蔵を講談風にまとめた正史実伝伊呂波文庫を上品なフランス文に翻訳した。

1957年に彼の不朽の名作『中国鍼灸学』が出版されて以来今日まで、この本がすべての西洋語の中国鍼灸の刊行物の主な出典となっている。スリエ・ド・モランが使用した文献は以下の通りである。

- 明、楊蕪賢校正増補、『鍼灸大成』（1573年）
- 明、李梴編撰、『医学入門』（1575年）
- 清、李守先撰、『鍼灸易学』（1798年）

彼は「気」と「経絡」を訳するのに初めてエネルギーとメリディアンという言葉を使った。これらの名称は、その後あちこちから次のような批判を受けた。エネルギーという語は現代力学から借用した術語で中国医説の多種の「気」を表すには狭義である。それでもニーダムはエネルギーという訳を認知した。また、医学家ユアル等が指摘したように経絡は気と血が流れる通路だとすれば、地理学に借りたメリディアンは虚構の線を指示する語として適切ではない。それにも拘わらずエネルギーとメリディアンは現在もフランス鍼灸界で一般に採用されている。

### スリエ・ド・モランとその弟子による経穴研究

スリエ・ド・モランはフェレーロルと協力してホメオパシーと針術を組み合わせるように努め、未開拓の研究分野に入った（ホメオパシーとは治療しようとする病気と同一の症状を起こすような毒物や薬物の微量を投与する療法である）。まず、最初に彼はワイエ点の図を調べ、大過半数の点が中国の経穴と一致しているということを確認した（一言で言えば、ワイエ点とは身体各所の圧痛点が特定の薬物の適応症を示すとされる）。そこで、

それらの一致点のうち8点は経穴の適応症とホメオパシーの適応症が一致することを明らかにした。例えば、耳門はアギの樹脂の適応症に相当する。気穴は白金、育門はエンジムシ、腹結は錫など。大戦直後、その弟子ドラフユイはその研究を続けてホメオパシーと経穴の対照点の数を10まで発展させた。

スリエ・ド・モランらが工夫した針灸とホメオパシーの総合治療法はフランスにおいて現在までも盛んである。さらにスリエ・ド・モランの業績として、脈診法の詳細な研究の結果が挙げられる。

1950年、72歳になった彼は、鍼灸学者として栄光を極めていたが、弟子の一人によって不法医業を当局に告発され裁判にかけられた。不起訴処分にはなったが、この苦難は晩年の健康を衰えさせ、1955年脳卒中で他界した。

大戦直後、ドラフユイはフランス最初の皮膚の電気抵抗を測定して経穴の存在及びその位置の決定ができないかを試みたといわれている(だが、すでに1936年ブイエはスリエ・ド・モランの指導のもとに「針術に現れる電気現象に関する記録」を発表する)。ドラフユイは皮膚の抵抗の少ない点を経穴と必ずしも部位的に一致せず、またその数が経穴よりはるかに多いということ認め、1951年ツボの電氣的測定の研究を中止してしまった。この間、ブルネとニポアイユ等は電気技師グルニエの協力のもとに測定器を制作し、いろいろ研究を継続していた。それ以後ドラフユイとニポアイユの間に激しい論争が起き、フランスの針灸界は派閥争いで分裂し、最近に至るまで大別すると、中国古典の尊重を唱える伝統派と針術の科学的基礎を立てようと努める科学派に分かれていた。

伝統派の大きな潮流を活気づけた人々として、シャンクロ、ニュエン・グアン・ギ、シャツ、ムサなどを挙げたい。次々と『黄帝内経素問』、『靈枢経』、『難経』、『甲乙経』等の仏訳を出し、これらに解釈を与え、針灸学の研究に十分な基礎資料を提供した。

#### ・ノジエの耳針法

50年代、ポール・ノジエは針灸の奇妙な発展といえる耳針法を作り上げた。そのきっかけは、彼

が1951年マルセイユ地方で、ある治療師のお婆さんが耳殻を焼灼して坐骨神経痛を治すのを見た時である。

1953年初めて耳の対輪と脊椎に対照点があるのを発見する。さらに、耳殻は身体の縮図であるという事実を確認した上で、耳殻と身体各部の対照点(反映点)を探索する。1957年ドイツの針灸学雑誌にその研究報告を発表。1958年以降、ノジエの報告は上海中医雑誌にも載ったが、西洋人としてこれは珍しいことである。1968年耳殻心臓反射を発見。

実際には耳針法の由来は不明である。現代の体系化された耳針法とは異なるが、中国の鍼灸学古典の中にも耳針法の芽生えが随所に見える。また、ノジエと同時期に文化革命の間、中国の研究団も同じ分野を開拓していた。

・中国での針麻酔報道と文化大革命による波紋  
70年代に政治的宣伝の手段として中国から全世界に報じられた針麻酔のニュース(実は針痛覚麻痺法という方が良い)はフランスに大騒ぎを引き起こした。

フランス最初の針麻酔下手術は、日本より1年くらい遅れて1973年5月にリオンの病院で行われた。外科医は外科教授ロシャ及びマイエ両氏で、針師はジャリコ氏であった。第一例はフランス人女性の甲状腺切除術(麻酔に用いた穴は合谷、内関、足三里)、第二例はイタリア人男性の単径ヘルニア手術(麻酔穴は三焦兪、腎兪、気海兪、三陰交)。しかし、フランスでの針麻酔は不完全で西洋人のメンタリティに合わなく、従来他の麻酔法に劣ることが明らかになって、結局いつの間にかお流れになってしまった。しかし、針麻酔はフランス針灸界での伝統派と科学派の両派を疼痛に対する戦いに向けて連合させ、両派の交流を促進したという結果を生じた。

この間、中国では文化革命が起こり、毛沢東は政治、経済的な動機で中医という伝統医学を振興していた。実際には、古代医学から現代科学と矛盾した要素を排斥しながら利用しうる要素を西洋医学的に結びつけ、実用主義に基づく新しい伝統医学を完成させようとしていた。1958年版の

「中国鍼灸学概要」は陰陽説にも五行説にも少しも触れず、この研究方向を具体化した。1977年フランス語版が北京で出版されるとフランスで直ぐに脚光を浴び、伝統鍼灸学入門とされた。現代においてもなお欠点を含むにも拘わらず、その人気は落ちることなく、ロングセラーになっている。

#### ・フランスでの鍼灸資格

1986年フランス当局は伝統的針治療法と針師の職業を公認する方向を目指す、医学アカデミーと医師会に拒絶される。

現代フランスでは針術実施は法律上で医師と限定されている。実際には医師資格なしに針術を施す人(マッサージ師など)が多く働いていると思われる。また、パリには、東南アジアから来た中国出身のおびただしい移住民の中にも非公認の針師が少なくないと推測されている。

1990年以来、医師が針師として開業する為には9か所の大学における共通免状が必要になっている。針術は法的に認可されていながら、医学専門の一分野としては認知されていない。

2002年にヨーロッパ共同体が発足以来、あらゆる分野での法的規制が共有となりつつある。従って、針灸においても将来的に何らかの統一が見られるかも知れない。

新しい発展と確立を期待しているものである。

#### <参考となる文献>

- 1) Anon. Les Secrets de la Médecine des Chinois, consistant en la parfaite connaissance des pouls. Envoyé de la Chine par un Français, homme de grand mérite. Année 1671. Paris. Dervy. 1993.
- 2) Bossy J. Histoire de l'acupuncture en Occident. Méridiens. 1980; 49-50: 13-54.
- 3) Choain J. George Soulié de Morant. Méridiens. 1978; 43-44: 13-31.
- 4) Dabry (Le capitaine P). La médecine chez les Chinois. Pris. Plon. 1863.
- 5) Huard P, Wong M. La Médecine des Chinois. Paris. Hachette. 1967.
- 6) Huard P, Wong M. La Médecine chinoise, Paris. PUF. 2e éd. 1969.
- 7) Huard P. Quelques emprunts de la médecine française à la médecine chinoise. XVIIIe et XVIIIe siècle. Revue du Polais de la Découverte. 1973; 2(12).
- 8) Jacquemin J. George Soulié de Morant, sa vie, son oeuvre. Revue Française d'Acupuncture. 1985; 42: 9-30.
- 9) Jarricot H, Wong M. Connaissance et Evolution de l'Acupuncture chinoise en France. Lyon Méditerranée Médical. 1972; 8(17). s.p.
- 10) Kaempfer E. Histoire naturelle, civile et ecclésiastique de l'Empire du Japon, composée en allemande et traduite en françois sur la version anglaise de Jean-Gaspar Scheuchzer. La haye. 1729. 1734.
- 11) Lu Gwei-Djen et Needham J. Celestial Lancets, History and Rationale of Acupuncture and Moxa. Cambridge University Press. 1980. Reprint Routledge Curzon. 2002.
- 12) Malnic E. Acupuncture, l'histoire et la pratique d'une Médecine ancestrale. Paris, Seuil. 2003.
- 13) Martiny M. Histoire de la rénéseite de l'Acupuncture en France. Méridiens. 1976; 41-42: 13-21.
- 14) Nakayama T. Acupuncture et Médecine chinnoise vérifiées au Japon. Traduit du japonais par T. Sakurazawa et G. Soulié de Morant. Paris. Le Francois. 1934.
- 15) Obringer F. Saves-vous tater le pouls a la mode dos Chinois?- L'introduction de la Médecine chinoise en France du XVIIe au XXe siecle. In: Médecines chinoises. Paris La Villette. 2001: 121-31.
- 16) Ohsawa G. L'Acupuncture et la Médecine d'Extreme-Orient. Paris. Vrin. 1969.
- 17) Rempp C. George Soulié de Morant. Les Textes médicaux de 1929 a 1951. Revue Française d'Acupuncture. 7(42): 39-42.
- 18) Soulié de Morant G. Precis de la vraie Acupuncture chinoise. Paris Mercure de France. 1934, 1964, 1993.
- 19) Soulié de Morant G. Acupuncture

- (Communications 1929, 1951). Paris. Tredaniel. 1980.
- 20) Soulié de Morant G. Le Trésor des Loyaux Samourais. Histoire des quarante-sept Re-ninns. Paris. H. Piazza. 1927.
- 21) Unschuld P-U. Médecines chinoises. Paris La Villette. 2001.
- 22) Wong M. L'Anesthésie par l'Acupuncture. Andés. 1973; 3: 4-16.
- 23) 東郷俊宏 . お灸の歴史 - 科学史の視点から - . 全日鍼灸会誌 . 2003; 53(4): 46-61 .
- 24) ケンペル . 日本誌 . 今井正訳 . 霞ヶ関出版 . 1973.
- 25) 矢沢利彦 編訳 . 中国の医学と技術 . イエズス会士書簡集 . 平凡社 . 1977.
- 26) 間中喜雄 . 針灸の理論と考え方 . 創元社 . 1971.
- 27) 中西啓 . 長崎のオランダ医たち . 岩波書店 . 1975.

#### 追記：著者紹介

##### **Alain Briot**

パリ在住。皮膚科医。

2001年、欧州滞在時に Collège de France 日本部図書室司書の方から紹介された。本文でも触れられている Pierre Huard (平凡社 世界大学選書『中国の医学』の著者) に師事し、日本医学史、特に鍼灸医学史をテーマに研究。筆者がお会いした時はちょうどパリの古書店で蔵書家 Blondolet の日中医学書コレクションのオークションが開かれる直前であったが、同オークションのカタログに掲載された詳細な解題を執筆したのが Briot 氏であった。医学史に限らず、浮世絵、歌舞伎といった空間芸術など、近世の日本文化全般に詳しい。日本医史学学会会員。フランス医史学会会員。日本鍼灸史に関する論文多数。

(全日本鍼灸学会国際部 東郷俊宏)



## The Development of Acupuncture in France

Alain Briot

### Abstract

The earliest informations about acupuncture were introduced in France 1671 by an anonymous handbook of Chinese pulsology written by a French Jesuit. It preceded by more than a decade the books of Cleyer, Ten Rhyne and Boym.

During the 17th century, the French society was fascinated by China and was familiarized with Chinese medicine through the medium of the abundant reports of the French Jesuits from the Peking court, but its interest was focused on the correlations between East and West through topics like pharmacopoeia and sphygmology. Acupuncture was just considered as an exotic and unscientific therapy, in spite of the influence of Kaempfer who brought many valuable informations.

The first clinical experiments of acupuncture were made in the beginning of the 19th century by Berlioz, Cloquet and followers. A few later, Sarlandière was the first to supply electricity to implanted needles. But all these pioneers had a personal approach and did nothing but a "needle therapy" in loco dolente. Their misunderstanding, their excess and their failures resulted in giving up acupuncture from the middle of 19th century. The remarkable work of Debry de Thiersant could not get it out of oblivion.

In the 1930's Soulié de Morant who had a deep knowledge of the Chinese world, achieved the renaissance of the true Chinese acupuncture in France. His followers keep on developing acupuncture till now through many active schools shared by scientific and traditional currents.

We point out here and there some facts that show the sporadic influence of Japan along the history of acupuncture in France.

*Zen Nippon Shinkyu Gakkai Zasshi (Journal of the Japan Society of Acupuncture and Moxibustion, JJSAM). 2005; 55(1): 77-85*

Key words: France, history of acupuncture, Soulié de Morant, Sarlandière, Dabry de Thiersant